



「たとと吸い込め」

現代福祉学部 4年
山田早紀

どうやって吸っていたの
吐いていたの

当たり前すぎて考えたこともなかった。

中学からの夢であるアメリカへの派遣留学

必死で勉強して必死でお金を貯めて掴み取った好機

だけど渡米一週間前になって

もう辞めたいし逃げ出したくなった。

大好きな人は誰一人居ないアメリカに行くのは無かったことに、したかった。

だけどいざ行くと毎日が幸せできらきらステンドグラスから差す光のよう

大好きな人たちはもう傍にいないけど、毎日連絡はしているし
新しい大好きな人たちが私の傍に居てくれる

家族の祈り友達の激励先生の期待

それらはひとつになり

悪意を跳ね返し世界中どこにいても私を庇護するあたたかな空気となる

それらは追い風となり

それらは酸素となり

血を巡り細胞の隅々まで届く力となる。

私はどこに留学しても大丈夫

どこに就職しても大丈夫

どこまでもその空気は付いてきてくれる守ってくれる

呼吸せよ。たとと吸い込み、めいっぱい躍動せよ



「迷ったら前へ進め」

人間環境学部 1年
石川智大

地方に生まれた私にとって、市ヶ谷は大会だ。成田から上野、秋葉原を經由して飯田橋へと向かう車窓の風景は次々と移り変わってゆく。一方、満員電車の中でほとんどの乗客がスマートフォンを操作する光景は全く変わらない。一体彼らはスマートフォンを持っていなかった時代、車内でどのように過ごしていたのだろう。そんなことを考えながら飯田橋を降り、ゆっくり歩いて20分ほどで大学に着く。キャンパスに足を踏み入れると、そこには都会独特の空気と多様性が広がっている。まとまりのない、ざわついた空気を生み出す人間の多様性。入学して5ヶ月の間に、さまざまな出来事があったことを思い出す。

私は法政大学人間環境学部人間環境学科に入学した。入学式は武道館で行われ、学部説明会も大きな教室で行われた。最初の一週間はとてもしんどい日々だった。授業が始まると教室の大きさや授業を受ける生徒の数に圧倒された。5月になると落ち着いてきたものの、月曜日から土曜日まで授業を受け、日曜日は教習所に通う日々ですっかり疲れていた。

5月のある日、58年館1階の入り口に1羽のスズメが落ちていた。明らかに小さい、ヒナである。法政大学のキャンパス内は人通りが多く、まして入り口にそのまま放置しておく誰かに踏まれかねない。近くに親の存在も確認できなかったので、私はヒナを安全な緑の中に逃がした。私はこのスズメを見たとき、都会の中にも自然があるという安心感を覚えた。と同時に、どこか自分と似ていると感じた。他の友人は高校時代からの付き合いやサークルの仲間や先輩がいた。しかし、当時の私にはそのような交友関係は一切なかった。巨大な法政大学の下、孤独な生活を送ることは想像以上に厳しいものだと思った私、自然の中でたった1羽になったときに無力さを知り、その場に立ちすくむしかなかったスズメ、この出会いは私の生活を大きく変えた。授業の中で多くの知り合いや先輩、素晴らしい先生方にも巡り会えた。人間環境学部独自のプログラムであるフィールドスタディに応募し、メンバーに選ばれた。確かに私とそのスズメは同じような存在だった。しかし最大の違いは、私が何か物事を実行する前に躊躇していたことだと、あのときははっきりと分かったのである。

7月になり課題レポートや定期試験に追われる日々となった。必死に取りかかると終わりの見えない課題を前に、ネガティブになりかけていた。7月中旬、すっかり疲れて外濠公園を歩いていると目の前に1羽のスズメが現れた。若いスズメだ。私ははっとした。「あのときのスズメだ!」産毛で覆われていた体は立派な茶色の羽毛となり、風切り羽も発達していた。ほおの黒い斑点はまだ小さかったが、もう一人前だ。しばらく私の様子をうかがった後、仲間とともに飛び去っていった。この後、私は課題を終わらせ、定期考査も無事乗り切った。8月には教習所を卒業し、9月になるとフィールドスタディで北海道に行き、自然環境に触れ、多くの人々と出会った。成績が気になっていたがなんとか大丈夫だった。

その後スズメがどうなったのか、私は知らない。しかし私は1羽の小さな存在によって法政大学の空気を再認識した。活発でエネルギー溢る空気、それを作り出す人々の多様性。そして都会に息吹く命と生物多様性。あのスズメが私に気づかせてくれたことと、北海道で自然保護の仕事をしている方の言葉は、今も私の原動力となっている。

「迷ったら前へ進め」



「カラフル - Colorful」

法学部 4年
高品万紀子

「多様性」という言葉を聞いた時、頭の中にパッとそんな単語が浮かぶ。誰もが色鉛筆を使ったことがあると思う。蓋を開けると数色から数十色のカラーが並んでいて、何か絵を描く時、ぬりえを塗る時に自分で選んで使った。もし、全部同じ色だったら。あの頃のお絵描きは楽しかっただろうか。いいや、楽しくなんかない。お気に入りの色とそうでない色があつた。だからといって、そうでない色を折ったり投げたり、酷い仕打ちをしただろうか。

いいや、私はしたことがない。

友達の顔を思い浮かべる。ひとり、またひとり皆違う顔をしている。人は皆、その人の色を持っていると思う。「田中さんは赤色」とか、そんなハッキリと誰が何色ということではなくて、「隣の人とは違う色という色」。だから、おもしろい。自分と全く同じ色の人はこの世にはいないし、万が一いたとしたら友達にはなりたくない。だって、それってつまらない。

世界はカラフルで、そのカラフルを楽しむことが人生だ。そう思うようになったのはこれまで沢山の人の出会い、様々な国と文化に触れ、そのカラーに好奇心を掻き立てられたからだと思う。今この文章を書いている私はインドネシアのスラバヤというところにいる。ここでも毎日のようにそのカラフルな世界に興奮している。オランダの植民地時代を経て、港から栄えたこの都市には様々な人たちが住んでいる。アラブ系の彼らは昔ながらの市場で野菜を売り、35度の気温の中熱いコーヒーを飲んで休憩している。中国系の彼らはオフィスで仕事を終え、車でショッピングモールに向かっている。

とある留学する学生を応援する奨学金制度に申し込み、合格をもらいありがたく今ここにいる。この時に全国から集まった沢山の学生に会い、「なんてカラフルなんだ。」と感動したのを今でも覚えている。彼らの中には私と同じようにその「カラフルさ」に興奮していた人が多くいたと思う。カラフルな世界に触れることでまた自分の新たなカラーがうまれるように感じる。それがまた、楽しい。

「多様性を受け入れよう。」「多様性を追求しよう。」「多様性が必要だ。」そんな言葉を目に、耳にする頻度は昔よりずっと増えた。そんな風に言われるとなんだか身構えなくてはならないような気持ちになる。「多様性」という言葉にあまり捉われずに、「カラフルな世の中」を楽しもう。そんな風に思っている。多様なのは当然だ。色鉛筆と同じで、多様であるから世界ができていく。多様性が必要なことから、私たちには。

「でも多様性、多様性って言われてもなあ。」なんてもし少し困っている人がいたら、一度「カラフル」という言葉を思い浮かべてみてほしい。なんだか楽しくなってこないだろうか。

多様でない世界なんて。多様でない人たちなんて。そんな一色の世界なんて。カラフルに生きよう。カラフルを楽しもう。世界よ、君よ、私よ、カラフルであれ。



「地続きの多様性」

社会学部 4年
三澤明紀

多様性という言葉から私は、宗教、人種、性別などの単語が連想される。日本は長い間単一国家と言われてきており、親の世代と話してみると、近年の「国際化」は驚くほど急速なものという印象のようだ。それにも関わらず情報が迅速かつ幅広く入ってくるために、遠くの土地もしっかり把握できていない社会構造も既知のものに思えてしまって、前掲のような単語と結びつくのではないかと考えている。

しかし、多様性とはそもそもそのような大それたことではなく、実はもっと身近に、いたるところにあるのではないだろうか。学校に集められた私たち、授業やゼミで一つの部屋に集められる私たち、その一つをとっても、それは多様性の集まりであると感じるからだ。

小中高と、ほぼ1クラスしかない学校に通っていた私にとって、自分が知っている世界は出身地も年齢も大抵同じで、自分の当たり前は疑うことなくみんなの当たり前であると思い込んでいた。わずかに異質だと感じたのは、転校生を前にした時くらいだろうか。しかし大学に入ってから、会う人会う人が年も、出身地どころか国籍も違っている場合もあつて、こんな人もいるんだなと感心することもあれば、とうてい自分には理解できないと憤りを感じたこともあつた。他者どう共生するかを考えざるをえないという点では、ごく日常的なこの環境すら多様性が注目される現代社会の縮図だと感じた記憶がある。

それを実感した例の一つが授業内でのディスカッションだ。地区の施策を考える授業で子どもの教育について話し合った際、各人が思い浮かべる児童のイメージが見事なほどに多岐に亘っていたのである。その子どもの生活環境はどんなものか、友人関係や学力などはどうか、などのイメージする内容が、地方か都市かの違いだけでなく、同じ東京都内の出身者でもこんなに違うものなのかと驚くことばかりだった。たかだか電車で1時間足らずの距離でしかないのに、同じ東京なのに、と思いつつ、実際に話を聞くことで知らない世界、自分が持っていない視点やどれだけあるものかと考えさせられた。同じ大学の同じ学部が集う学生間でもこれだけ認識が違うということは、多様性とは本当に、目の前から地続きに果てなくあるものなのだと思えた貴重な体験であつたし、大変に興味深いテーマを提示してもらえた講義だったと思っている。

異質なものに出合ったとき、人は、拒否感を持つ好奇心を持つかのどちらかに分かれるのではないかと思う。私は大学というたくさんの人が行き交う場所で人に会う面白さを知ったことから、本学を通して3年次・4年次と海外での交流プログラムに参加する機会を得た。ことに、今夏のベトナムでのプログラムでは、マレーシア、シンガポール、リビアなどの学生たちと彼らの母国のことから学校のこと、流行の話まで、硬軟とりまぜて情報交換をすることができた。そこでは、文字通り多様な文化や考え方があることを知ることができたが、前述のように学内での多様性にもしっかりと目を向けていきたい。本学のさまざまな講義、企画、人、を自分はこのように受け取ることができるのだろうか。各々のすべてを「理解する」には至らなくても、つねに「受け入れ」「関心をもつ」姿勢を保ち続けたいと考えている。